

### 世代間交流としてのオーラルヒストリー： MEMORO「記憶の銀行」の事例

UMEZAKI, Osamu / 梅崎, 修

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン：法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

129

(終了ページ / End Page)

144

(発行年 / Year)

2013-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008819>

〈資料紹介〉

# 世代間交流としてのオーラルヒストリー —MEMORO「記憶の銀行」の事例—

法政大学キャリアデザイン学部准教授 梅崎 修

## 1 口述資料の解題

本稿は、MEMORO「記憶の銀行」の日本代表である富田直子氏に、その活動の内容を語っていただいた口述記録である。高齢者の記憶を聴いて多くの人に公開するという活動は、後述するようにコミュニティ再生やキャリア教育において多くの可能性を秘めた社会活動であると言えよう。さらに、この団体は、自らの活動をオーラルヒストリーとは呼んでいないが、研究の文脈で捉えられやすいオーラルヒストリーを広く一般の社会活動に活かす試みであると言えよう。はじめに本節では、コミュニティの再生、ソーシャルキャピタルの再構築、および世代間交流の効果という三つの観点からこの口述記録の意味を考察したい。

### コミュニティの再生とソーシャルキャピタル

ライフスタイルの多様化や社会全体の流動性の高まりによって、家族、地域、および会社などのコミュニティはその機能を衰退させている。とくに地域住民同士のつながりが希薄化していることが問題視されている。人とのつながりの希薄化の背景には、経済のグローバル化に伴う産業の空洞化、地方と都市間の格差拡大、人口減少、高齢化、核家族化などの社会現象がある。これらのつながりの希薄化は、高齢者の孤立や子育て放棄や虐待などの社会問題を生み出す背景と考えられている。

コミュニティの機能を分析するための概念として、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）があ

る<sup>1)</sup>。パットナム（Robert D Putnam）は『哲学する民主主義』の中で、イタリアの北部と南部で政府の統治効果に格差があるのは、ソーシャルキャピタルの蓄積の差異によるものだと指摘し、その中で「ソーシャルキャピタルとは、人々の協調活動を促すことにより、その社会の効率を高める働きをする社会制度」と主張した<sup>2)</sup>。続けて『孤独なボウリング』では、アメリカの過去30年間の地域社会におけるソーシャルキャピタルの減少を指摘した（Putnam (2000)）。さらに、ソーシャルキャピタルが蓄積された社会では、人々の自発的な協調行動が起こりやすく、個人間の取引に係る不確実性やリスクが低くなるばかりでなく、住民による行政政策への監視、関与、参加が起こり、行政による市場機能の整備、社会サービスの提供の信頼性が高まることにより発展すると論じた。このようなソーシャルキャピタルの公共的側面を強調した議論は、その他の研究者によって受け継がれた。日本においては、稲葉陽二氏がソーシャルキャピタルの概念に「心の外部性」を加えて「心の外部性を伴った信頼、規範、ネットワーク」と定義している<sup>3)</sup>。失われつつあるソーシャルキャピタルを何らかの方法で再構築することは、コミュニティの再生に繋がると考えられる。

### 世代間交流の効果

ソーシャルキャピタルの再構築の中で、とくに注目されているのが、世代間の交流である。村山（2011）が指摘するように、米国では60 - 70年

代に核家族化や退職者のコミュニティ移住のような家族の中の世代断絶に対して世代間交流プログラム (intergenerational program) が生まれ、各地に広まっていた (Larkin, E. & Newman, S. (1997) 参照)。米国で最初の世代間交流プログラムは、1963年の“Adopt a Grandparent Program”とされる。このプログラムは、地域の病後療養所に子供が訪問するというものであった。その後、数々の世代間交流プログラムが実施され、1978年には、ピッツバーグ大学の (the university of Pittsburg) 教授 (現名誉教授) のサリー・ニューマン (Sally Newman) を中心に、世代間交流の実践者と研究者が協力したネットワーク組織 “Generations Together” が設立されている。

米国や日本における多様な世代間交流プログラムの事例は、村山 (2011) によってまとめられている。高齢者と若年者の組み合わせも多様であり、実際のプログラムの中身もそれぞれ異なる。その予測される効果も様々である。地域のソーシャルキャピタルを構築し、コミュニティの再生を目指すという効果もあれば、若年者がインタビューを通して、共感性や世代継承という社会的役割を獲得するという個人の発達に関する効果もある。後者は、広い意味でのキャリア教育と呼ぶこともできる。

ところで、村山 (2011) では、すべての世代間交流プログラムで効果があったわけではなく、効果が確認できなかった事例も確認されている。この検証結果は、極めて重要な発見事実と言えよう。すなわち、世代間交流には、どのように実施するかという手法の開発が求められている。同様の指摘は、ライフストーリー・インタビューによる世代間学習の可能性を検討した中川 (2009) でも指摘されている。なお、中川 (2009) によれば、ライフストーリー・インタビューは、社会学や心理学で発展してきた研究手法であるが、社会活動での使われ方においては、歴史学で使われるオーラルヒストリーとの線引きは曖昧である。本稿では、ライフストーリーの特質も実践的なオーラルヒストリーには含まれるという前提で

オーラルヒストリーという言葉を使っている<sup>4)</sup>。

中川 (2009) は、米国と日本における世代間インタビューの実践を検証し、世代間インタビューを学習活動として組織化するために留意すべき点として以下の3点を指摘している。

第一に、他人同士がいきなり交流することは難しいので、老若の「共通基盤」を探すことが必要である。共通の趣味やコミュニティ、および共通の課題などを共有することでコミュニケーションが成り立っている。

第二に、支援する組織の役割が重要である。自発的にコミュニケーションが生まれることは少なく、支援組織による継続的な介入が注意深く行われる必要がある。

第三に、質問項目をある程度絞り込む半構造化インタビューよりも語り手の主体性を重んじる自由面接の方がよい。

もちろん、上記のような対話は理想であって、実際には「高齢者はいつも同じことしか言わない」「すべてお決まりのストーリーに結び付ける」という若年者の反応も紹介されている。それゆえ、語り手の聴き手の相互行為が生まれるようにインタビューの教育も必要になると言えよう。

以上要するに、世代間交流の効果が注目され、なかでもオーラルヒストリーのようなインタビューによる世代交流への期待が集まっているが、同時にその手法や運営には、まだ改良点も多いことがわかる。本稿の記録は、地域や学校で地域活動やキャリア教育への取り組みを続ける人たちに役立つ情報と言えよう。

## MEMORO「記憶の銀行」について

最後に、MEMORO「記憶の銀行」の概略を説明しよう。本オーラルヒストリーの語り手である富田直子氏は、特定非営利活動法人 MEMORO「記憶の銀行」の代表である。このインタビューは、2011年6月8日 (水) の梅崎ゼミナールの時間に実施された。

MEMORO は、人生の先輩方の記憶を「社会的・文化的遺産」として未来に繋げることを目的に、

60歳以上の方の昔の記憶を数分の長さのインタビュー動画や音声という形で広く一般から収集する活動をウェブ上で展開している非営利団体である<sup>5)</sup>。

MEMORO「記憶の銀行」ホームページを見れば、MEMORO「記憶の銀行」の概要を理解できる。MEMOROは、2007年8月にイタリアのトリノで誕生したプロジェクトであり、最初のウェブサイトは2008年6月15日に開設された。2009年9月からは、イタリアの非営利団体「記憶の銀行」が運営にあっている。また、日本では2009年10月にチンツィア・ドルチャーニを初代表とした任意団体として活動を開始、2010年3月に日本語版ウェブサイトをオープンし、2011年2月2日以降は、内閣府認証特定非営利活動法人MEMORO「記憶の銀行」として日本サイトの運営にあっている。

MEMORO「記憶の銀行」は、地域や学校などで様々な実践的なワークショップを展開している。ホームページでは、数々の活動が紹介されているので、本稿と合わせて読めば理解しやすいと言えよう。また、富田の報告では、梅崎ゼミの学生が映像を収集し、MEMOROのサイトにアップするやり方に対して講義をしてもらった。

## 注

- 1) “Social Capital”を直訳すると「社会資本」だが、これは政府等の公共機関により形成され、財・サービスの生産活動に間接的に貢献する道路、空湾、上下水道など人びとが共同利用する公共財、社会共通資本を指すものと同義で使われることが多いため、誤解を避ける点から「社会関係資本」が日本語訳として一般的となっている(宮島喬編(2007))。
- 2) Putnam(1993)参照。
- 3) 稲葉(2011)参照。
- 4) 中川(2009)では、オーラルヒストリーでは歴史をつくることに重きが置かれるのに対して、ライフヒストリーでは人生の意味付けや生き方を

つくることに重きが置かれるという点を重視し、ライフストーリーという言葉を強調している。

- 5) MEMORO「記憶の銀行」ホームページより(<http://www.memoro.org/jp-jp/index.php>)。

## 参考文献

- 稲葉陽二(2011)『ソーシャルキャピタル入門』中公新書。
- 中川恵里子(2009)「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」『生涯学習基盤経営』第34号 pp.99-112
- 宮島喬編(2007)『岩波小辞典 社会学』岩波書店
- 村山陽(2011)「『世代間交流』学の樹立に向けて」『哲学』第125集 pp.75-104
- Larkin, E. & Newman, S. (1997). Intergenerational studies: A multidisciplinary field, *Journal of Gerontology Social Work*, 28, pp.5-16
- Putnam, R. D. (1993), *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press 河田潤一訳 [2001]『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』NTT出版。
- Putnam, R. D. (2000), *Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. 柴内康文訳 [2006]『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。

## 2 口述記録

**富田** これは私たちのMEMORO「記憶の銀行」のスタッフとしてお手伝いしてくださっている映像ディレクターが作ったMEMOROの紹介動画です。今の動画でMEMOROとは何なのか、何をしようとしている団体なのかが大体伝わったと思います。それを踏まえて、お話の前半は活動概要についてご説明させていただき、後半では実際の動画の撮り方など、具体的なところをご説明させていただきます。

## MEMORO「記憶の銀行」とは

最初に活動概要からご説明させていただきます。MEMORO「記憶の銀行」は「人生の先輩方の記憶は、私たちの宝物です」をコンセプトに、60歳以上の方の記憶を未来に伝えるためにイタリアで生まれた無料のオンラインアーカイブです。広く一般から動画や記憶を収集し、公開することによって社会文化遺産を広げる活動を行っています。

必要な資料は渡していますが、今、正面に映し出されているのは皆さんの手元にあるものとは少し違う説明資料です。ここに出ているイタリアの4人の若者は大体30代半ばの人たちで、トリノの郊外のピーノ・トリネーゼという町に住む幼なじみです。男性3人は10歳のときから町のバスケットボールチームのメンバーだったそうですが、彼らがMEMORO「記憶の銀行」を2007年にはじめました。

最初はルカとフランコの二人が、ベトナムに二人旅に出掛けたときに、ビーチでぼうっと海を見ながらふと「今まで僕たちは人生で何か大切なことをしてきただろうか、役に立つような仕事をしてきただろうか」と考えはじめ、「そうだ、昔おじいちゃんやおばあちゃんの膝の上で聞いたようなお年寄りの記憶を残していけば、それ自体に何か意義があるのではないか、その活動をはじめよう」という話になったのがMEMORO創設のきっかけです。そしてベトナムから戻り、幼なじみの2人に声を掛け、早速その夏から4人はビデオカメラを持ってイタリア中を回りはじめました。そして収集した動画を元に、2008年にイタリアのサイトをオープンさせ、ルカとバレンティナがフルタイムの職員になりました。そうすると、これは面白いということで世界中のメディアで紹介されるようになり、その新聞記事などを見たドイツやスペインをはじめ、ほかの国々でも「うちの国でもやってみよう」と輪が広がり、各国でサイトがオープンしていきました。今は全部で11カ国になっています。イタリアでは途中でスポンサープロジェクトを受けながらお金が回るように

なり、仲間のロレンツォが2009年12月にフルタイム職員となった結果、3人がフルタイムの職員になりました。

11カ国に広がっていった中で、カメルーンなど思いもよらぬ国からも手が挙がってきました。当初は70歳以上の方の記憶を集めていたのですが、70歳以上という平均寿命的に見て対象者が少ない国もあります。そこで、世界規模での広がりを見せる活動として、世代を超えて記憶をつないでいく“世代の境界線が”何歳であるのかを考え直しました。すると、大体どの国でも企業における定年は60歳前後だということがわかりました。そこで、語り手の年齢を去年の12月に70歳から60歳に引き下げました。

## MEMOROの日本での活動

MEMOROは世界中のいろいろなメディアで紹介され、それを見た各国から、自分の国でもはじめたい、とどんどん手が挙がっていきました。

そして日本で活動が開始されたきっかけは、皆さんのお手元の資料にもある、「広がる『記憶の銀行』お年寄りへのインタビュー、ウェブに保管」という、イタリアで活動が始まり世界に広がっているという紹介記事が2009年10月30日の朝日新聞の国際面に掲載されたことでした。記事の左側のところに小さく、「欧米に続き日本でも」と書いてあったのですが、私の場合は、MEMOROの活動が今までしていた仕事とほとんど同じテーマだったので、記事を見たその日に「日本での立ち上げをお手伝いさせてください」とイタリアに電話をし、それ以来MEMOROにはまっています。ほかにも記事を見た多くの人から、MEMOROに興味を持った、なにか手伝えないかと問い合わせが入り仲間になりました。

ただ実は当時、日本にその時点で5年間住んでいたイタリア人女性、チンツィアの存在ゆえに「記憶の銀行日本でも」という文章が新聞に挿入されたことはお伝えしたいと思います。この新聞記事が出る2週間ぐらい前、チンツィアはインターネット経由でイタリアのテレビを見て「記憶の銀

行」の存在を知り、活動に感動してイタリアに「素敵な活動ですね」と感想を送りました。するとイタリアからすぐに連絡が来て、「君は日本に住んでいるのか。1週間後に朝日新聞という日本の訳の分からない新聞から取材を受けることになっているが、君は知っているか」と電話で聞かれ、「それは知っています。大きな新聞です」と答えると、「そうだとすれば、せっかく日本の新聞でMEMOROを紹介してもらえるようなので、日本でもMEMOROの活動が始まると言っているか。つまり君が窓口になってくれないか」と、突然打診をされたそうです。彼女は感想を送っただけなのに、イタリアからの反応は青天の霹靂でした。

ここでちょっと裏話ですが、実は彼女は忍者、くの一だったのです。彼女は日本のイタリアンジェラートの製造メーカーで働いていましたが、本来は古武道をやりたくて、ベネツィアで日本語を学んで日本に来たそうです。私もチンツィアから古武道をやっているとは聞いていたのですが、後になるまで、まさかそれが忍術であるとは知りませんでした。チンツィアは戸隠流忍術第三十四代継承者という方の弟子になるために日本に来たという面白い経歴があったのです。いつかイタリアで同じ流派の道場を開くというのが彼女の夢でした。そして日本で働きながらその先生の道場に5年間通い、それなりに学び黒帯も取った、師範の免許も取った、そろそろイタリアに帰ろうかなと悩みつつも、でも今の会社での仕事以外に何か社会的な活動をしたいと思っていた矢先に、たまたまインターネット経由でMEMOROを知ったわけです。

というわけで、突然日本の窓口担当者となったチンツィアは、朝日新聞の記事掲載前に日本語のホームページをとにかく1ページだけでも作らなければということで翻訳会社に依頼し、簡単なMEMOROの説明ページとお問い合わせフォームを作成、その翌日に朝日新聞に記事が出て、メールが40～50通来たところから日本での活動が始まりました。ですから日本での活動開始記念日は、朝日新聞に記事が出た2009年10月30日にして

います。

私もその記事を目にしてイタリアに連絡をとり、そして最初、チンツィアに会いました。その後、チンツィアは日本のMEMOROの初代代表として、彼女がイタリアに帰国するまでの半年間従事し、私が副代表という形で仲間と一緒にMEMORO日本を立ち上げました。

彼女は今、イタリアのMEMOROで世界各国の立ち上げ担当者として働きながら、向こうのスポーツクラブで古武道を教え始めたという連絡をもらいました。向こうでもちゃんと職を探して、着々と夢を実現しています。

私は今まで家族史や社史の制作などをつうじて世代を超えて思いをつなげていくという会社を一人でしていましたので、MEMOROは自分のライフワークの一部だと感じて連絡をとりました。そして、そういった意味では時間的自由が利いて動けたこともあって、去年1年間は本業そっこのけでMEMOROの活動に没頭してしまいました。

日本では2010年3月に、日本語版のウェブサイトオープンしました。また朝日新聞に取材していただき、『「記憶の銀行」日本にも』という記事にさせていただきました。今は私が代表を務め、コアで活動してくださるボランティアスタッフが10名ぐらいいる中で、今年の2月2日に内閣府のNPO法人の認証を受けました。

今、世界では動画が4500本ぐらい、日本ではまだこれからというところで200本近くという状態です。今の約200本の動画の多くは、MEMOROのスタッフの人たちの親戚だったりします。私が最初にMEMOROにアップした動画も、私の父です。それから母にも無理やり出してもらい、おじにも出してもらいました。投稿サイトとしての体裁をなすためには幾つか動画がないと一般に呼びかけもできないので、去年1年間はそのようにして準備を進めてきました。みんな本業を持ちながらやっているの、本当に1歩、1歩ですが、今後は投稿サイトとして一般の人たちにより積極的に呼び掛けていきたいと思っています。

## 国内メディアでの紹介実績

日本でもメディア受けがやたらと良く、本格的に始まっていないのに、朝日新聞に出た後には産経新聞や日経新聞、The Japan Times など、あとはいろいろな雑誌、NHKの「おはよう日本」などのテレビでも紹介していただきました。とてもありがたいことです。ただ、私たちは動画をみんなに投稿してほしいし、できれば活動支援としての寄付も頂戴したいのですが、そういうことよりも「いい活動だね」というような紹介ばかりで終わっています。これからはメディアを見てくれた方々で興味を持った人たちが、自分たちで動画を投稿してくれたらうれしいなと思っていますし、そうなるようにより積極的に発信していきたいと思っています。

日本のサイトが3月にオープンしてから最初は29本の動画ではじまりました。それから8月に100本、今は200本近くと、少しずつ増えています。語り手の数は今のところまだ47人で、60歳から101歳までいます。平均年齢は79歳です。

また、イタリアともいろいろ相談して、撮影する人のことは「メモリーシーカー」(記憶を探す人)と呼ぶことが最近決まりました。今、投稿を受け付けているのは動画だけなのですが、実はイタリアの方ではウェブサイトのリニューアルが行われて、レコーダーで取った音声も投稿できるようになっています。

ここで一つ、MEMOROにとって象徴的と思われる数字を紹介します。MEMOROのページを見ていただくと、いろいろな数字が右横に出ているのですが、その中で「引き継がれた記憶」という数字があります。これは動画再生総時間のことなのですが、誰かが動画をアップして、それを誰かが見ると、そのお年寄りの記憶が、見た人の頭の中に引き継がれたという考え方をしています。たくさんの方がサイトにアクセスして動画を見てくれると「引き継がれた記憶」の年月が増えていくので、これは数カ月前の数字ですが、今のところ9カ月と21日、16時間48分の記憶が、見た人の頭の中に引き継がれているのです。

日本のMEMOROでは、ウェブサイトの運営管理の他、去年の夏から冬にかけてオフィシャルセミナーをしたり、学生向けのワークショップを開催したりしてきました。そして今、初の地域連携プロジェクトである「としまプロジェクト」がスタートしています。豊島区のとしまNPO推進協議会の方と、としまユネスコ協会の方などが中心になって、豊島区の街の記憶を残していこうというプロジェクトです。そこでは豊島区の街の記憶の動画を募集したり、豊島区在住でメモリーシーカーになりたい人たちと記憶の語り手になりたい人を募集してマッチングしたりしながら、初の地域連携プロジェクトとして稼働を開始しています。

さらに私たちは無料のオンラインアーカイブの活動資金を「スポンサードプロジェクト」によって捻出しています。これは最後の方で説明します。

## MEMORO「記憶の銀行」の特徴

MEMORO「記憶の銀行」がほかの動画投稿サイト、例えば「YouTube」などと何が違うのかというと、まず一番には、MEMOROは60歳以上の方の昔の記憶を募集していると意味においてテーマが決まっていることが挙げられます。昔がいつまでかという明確な線はありませんが、大体若いころ、子どもころというような感じで、雰囲気的には高度経済成長期くらいまでです。だからといって10年前の記憶が入っていてもいけないという明確な線引きはありませんが、先日旅行に行ったなどという思い出話ではなく、昔の記憶に限定されています。つまり今の若者が知らないことを聞く、メモリーシーカーたちが興味のある昔の記憶を探すということがMEMOROのコンセプトになっています。

二番目として、投稿動画がインタビュー動画に限定されているという点です。「記憶の語り手」の顔が基本的に映ります。私は今年のお正月に母からお雑煮の作り方を教えてもらって、それをMEMOROに投稿したのですが、それでも一応、基本的に顔はある程度写します。千羽鶴の動画なども、最初は一応「千羽鶴を折ります」と言って

から手元を映しました。誰が話しているか分からないというのではなく、顔や表情も一緒に写すようにしてください。

三番目には、MEMOROでは語り手の生まれた年の情報をいただいているということです。投稿にあたっては語り手の生まれた年を入力しないと投稿できません。その人がいつ生まれた人で、いつごろの記憶なのか、それをセットで聞いて初めて、見た人がいつごろのことなのか分かるので、MEMOROの中では大切な情報です。

四番目の特徴として、募集している1本の動画の長さが短いということです。5分程度とっていますが、実際には2分程度あれば大丈夫です。イタリアで最初にコンセプトを考えた際、とにかく若者に見てもらいやすいメディアを使おうということでネットが使われたのですが、同時に気軽に見てもらえる長さの動画であることも必要でした。長く撮影した動画でもいいのですが、その場合はテーマごとやきりのいい時間単位で区切って投稿していただいています。一人の語り手が複数のテーマについて話してもいいのですが、いずれにしても一本の動画の長さが短いものをどんどん

投稿していただくことになっています。長く撮った場合は分割して、パート1、パート2などに分けてください。

最後に「YouTube」と一番違うMEMOROの特徴は、投稿された動画をいきなり公開するのではなく、事務局で一度内容を見させていただいた上でMEMOROのロゴをつけて公開し、MEMOROの趣旨に沿った二次利用に承諾していただくという点です。MEMOROでは、60歳以上の人で、昔の記憶を語っている動画のみを受け付けていますので、その趣旨にそっていない動画は公開しません。そして、次の世代に記憶をつなげていくという趣旨のもと、二次利用をさせていただくことがあります。将来、子どもたちの教材のDVDにさせていただくこともあるかもしれませんし、また、メディアなどで紹介したいといわれれば活用させていただきます。

ここで動画を幾つか見ていただきたいと思います。素人っぽいものからプロっぽいものまでいろいろですが、皆さんは神楽坂をテーマに撮影されるそうなので、地域に関連した動画を紹介したいと思います(図1参照)。

図1 MEMOROのホームページ

## \*\*\*動画1\*\*\*

これはイベント会場で撮ったもので、後ろがごちゃごちゃしていますが、こんなものもあります。ただ、声がすごく大事なので、声だけはきっちり取るようにしてください。あと、ゆったりしたものだ、例えばプロは2カメラで撮っています。

## \*\*\*動画2\*\*\*

MEMOROで募集しているのはあくまでも記憶なので、多少記憶違いがあったとしても、途中で曖昧な表現があったとしても、そのまま撮ってしまいます。とにかく記憶を残そうという活動になっているので、その辺はジャーナリズムとは違うかもしれません。つまり、中身が正確かどうかというよりも、その人が覚えていることを聞いておこうというものになります。

「記憶の銀行」ではメモリーシーカーが中心となって、聞いてみたいこと、探してみたい記憶を収集、投稿、公開していくという活動をしています。例えばおじいちゃんに昔の就職活動について話を聞いてみたいと思ったら、思った人がおじいちゃんのところへ行って撮らせてもらい、編集・アップロードしてMEMOROで公開していきます。

投稿された動画の公開は約1カ月後となっていますが、今回は授業での取り組みですので、投稿していただいてから1週間ぐらいで公開させていただくこともできます。最後に上映会などをするかと思うので、それに合わせられるようにしたいと思っています。

**MEMOROの活動に参加するには**

MEMOROの活動に参加するには、記憶の語り手としての参加と、メモリーシーカーとしての参加があります。記憶の語り手は60歳以上であれば誰でも参加できますし、メモリーシーカーの方も、デジタル機器が扱えれば誰でも参加できます。

皆さんにこれからしていただくメモリーシーカーの心構えとして、参考になるかもしれないので、ここで少し私の話をさせていただきます。

私はインタビューをして家族史などを作る仕事をしてきました。依頼主は大体40～60歳の方たちです。自分のお父さんやお母さん、自分のおじいちゃんやおばあちゃんの人生を全然知らないけれども、自分たちではまとめられないし、照れくさくて聞けない質問もある、そこで、そういう人たちに代わって私が質問を受けて、聞いて、家族のためだけの本や映像を作るような仕事をさせていただいていました。

実際に仕事をしながら、私は何とない仕事を作り出してしまったのだらうと思いました。私の場合、次の世代の家族につなげていくので、話を聞くときは未来の子どもたちの気持ちになって聞きます。自分が分かっていることでも、できるだけ子どもたちの目線で「それはどういう意味ですか」という質問を投げ掛けて詳しく話してもらったり、自分ができるだけ透明な存在になるように意識して、自分の後ろにいる未来の子どもたちに話しているように話してくださいという想いでいろいろな家族史を聞いてきました。そうすると、そのご家族には喜ばれますし、自分としても追体験のようにいろいろな人の人生を生きているような気持ちになって本当に楽しいのです。そして、自分だけでこの楽しさを享受するのはもったいない、これをもっとどのように広げていけばいいのかと思っていたときにMEMOROに出会い、それで真っ先に飛びついたのでした。

このMEMOROのすごいところは、そういうことを誰もがができる場を提供しているところです。MEMOROは一般の人たちが、自分の耳で聞いてみるという体験ができる場を提供しています。さらに自分が撮った映像が載るので、MEMOROの活動が続く限り、50年後、100年後も、意義を持って残っていくというところが面白いと思っています。

その反面、誤解を恐れずに言うなら、動画閲覧サイトとして「さて見ようか」と思って動画をク

リックしたときに、本当に面白い話に当たるかどうかは分かりません。例えばテレビは面白いところをピックアップして、上手な編集をしています。プロが作っているので興味深い構成になっています。でも、MEMOROは素人が撮って投稿するサイトです。テレビにはないよさ、自分で体験できる場があります。

テレビで見ているのとは違って、自分で直接お話を聞くと、その時代を自分が生きたような気持ちになったり、ときにはそのお話の内容から、50年、100年、150年という時間を平気でさかのぼれたりします。私は、50年後、100年後、150年後をリアルに自分のことだと感じられたときにはじめて、本気で50年後、100年後、150年後の未来が、自分のことのように感じられるのかなと思っています。時間軸のつながりを感じて生きていけたらすごく豊かですし、未来のことも、もっと本気で考えられます。

そのようなことをやりたいと思って、そもそも自分の会社を立ち上げました。メモリーシーカーになると、みんながそういう体験ができるので、できれば将来、中学や高校などの道徳の授業などで、一度みんなが体験してみるようなことになればうれしいなと思っていた矢先に、今回お声を掛けていただきました。こうして授業で使っていただけというのは何よりもうれしく思います。

そういった意味でメモリーシーカーは、未来の子どもたちに代わって記憶の語り手に質問を投げ掛けているのです。もちろん自分の興味でいろいろな質問をすることもありますが、面白い記憶を探し出してつなげていくという役割があります。それをベースに今回の取材に臨んでいただけたらと思っています。

私は一つの基本として、つらい記憶は無理に引き出さないことを心掛けています。映像の良いところは、質問したことに対して答えが返ってこない沈黙や表情など、それも一緒に残せることです。文章にしてしまうと、それを行間に込めるのはなかなか難しいのですが、映像だと、同じ記憶を同じ言葉で話していても、それが楽しかったの

か、つらかったのが全部出てくるので、それはやはり映像の情報量のすごさであると思います。

### トラブルを起こさないために

「昔の記憶をお話いただく前にご承諾いただきたいこと」として、最初に記憶の語り手の方に説明していただきたいのです。MEMOROの趣旨について説明していただいた上で、撮る前には必ず説明していただきたいと思います。

これは大事なので、上から読んでいきたいと思っています。「1）あなたが昔の記憶をお話しているところを、ビデオカメラで撮影させていただきます」。

「2）撮影した動画を未来の子どもたちに伝え残すために、編集や二次利用を含め、MEMOROにおいて自由に使用させていただく権利をいただきます」。話している人や撮った人に映像の著作権があるのですが、今後はMEMOROでも自由に使用させていただきますということです。

「3）撮影した動画は、全世界の人が見ることができるインターネットで公開させていただきます」。60歳以上の方は「インターネットって何」という人が結構います。私は「若者のテレビみたいなものです」と言ったりしていますが、皆さんなりの言葉で補足していただいて、要は誰でも見ようと思えば見られるということを理解いただいてください。そして、出たくない人を無理に撮らないでください。

「4）報道や広報活動など、MEMOROの事業促進の目的に限り、必要な範囲でいただいた個人情報第三者に提供する場合があります」。例えばテレビ等で使わせてくださいといったときに、その方のお名前と映像が出るようなこともあるかもしれませんが。または別途、取材に行きたいという話になった場合にはご紹介させていただいたりするかもしれません。

「5）写真を映像素材として使う場合には、撮影者の許可を得てください」。写真を使うとき、第三者が撮影した写真の場合は、その第三者に著作権があるので、その人に使用許可をきちんと取っ

てください。ただ、自分が撮影した写真であれば、使っていただいて問題ありません。何か写真を使うときには、そこは必ず注意してください。

「6) MEMORO の活動には原則、ボランティアとして参加していただきます」。出演料等はお支払いしないということです。

「7) お話の中で、第三者のプライバシーを侵害する発言など、違法な内容を含む発言はしないでください。MEMORO では責任を負えません」。昔話といえども、その中で固有名詞を出して、悪口を言われた人から訴えられたとしても、こちらではどうしようもできないので、そういうことはなるべく言わないようにしてくださいということです。

「8) インターネットで公開された動画を第三者がさらに編集したり公開したりする可能性がないとはいえませんが、MEMORO 以外の人が行った行為について MEMORO では責任を負うことができません」。インターネットの世界では普通のことだと思いますが、説明を添えておいてください。

皆さんがどのようにこれからプランを練って撮影に行くかは分かりませんが、私がお薦めするのは、何よりもまず語っていただく方に、今見せたような動画を見せることです。もしノートパソコンがあれば、ぜひそれを見せて説明してみてください。そうすると一発で分かります。そして「こういう話をすればいいのね」というのも、全部分かっていただけたらと思います。

参考に、記憶の語り手の方にも、昔を知らない未来の子どもたちが、日本のどこかで、世界のどこかで耳を傾けているということを考えてお話ししてくださいと、一言言って差し上げるとよいかと思います。

## MEMORO の活動概要

ここで MEMORO の活動をどうやって回っているのか、ちょっと事業的な話ですが、具体的な撮り方にいく前にお話ししたいと思います。

MEMORO の大きな活動は、無料オンライン

アーカイブ、投稿サイトの運営です。基盤整備活動として、ウェブサイトの運営、アーカイブの運営、アップされてきた動画を確認して公開する作業、あとは「動画を投稿してください」という呼び掛けや、ワークショップを実施して皆さんに撮り方や使い方を教えています。

それからいろいろなボランティアプロジェクトをしています。世代をつなぐ地域連携、としまのプロジェクトのようなものや、まだ連携していませんが、どこかの NPO と連携したり、学生と連携した今回のようなプロジェクトや、セミナーを実施したりしています。

でも、それを行うにはやはりお金が掛かります。私も去年はもやしばかり食べて過ごしていましたが、何とか事業にしなければ続くものも続きません。イタリアではある程度事業になっているので、日本でも事業にしようと思死です。一般からの寄付は普通に受け付けています。

それから MEMORO の特徴として、スポンサープロジェクトを企業に対して売っていくという活動があります。具体的には「世代を超えて記憶を引き継ぐプロジェクト」の企画・実施です。例えばイタリアではペローニという有名なビール会社でプロジェクトを実施しました。そのビール会社では、定年退職をした OB の方々に、昔ビールをどのように造っていたのかということ聞いた社史の動画のようなものを制作し、MEMORO のホームページの中に、ペローニの専用ページを作って掲載しました。ウェブページの代金を頂いて、そのときはプロのカメラマンとインタビュアーが行って映像を作ったので、プロによる映像制作費を頂くことでこのプロジェクトは成り立っています。もちろん会社としては普通の映像プロダクションに頼んでもいいし、自分のホームページの中に作ってもいいのですが、MEMORO に頼めば、払っていただいたお金が、世界中の人たちが投稿できる MEMORO 「記憶の銀行」の活動のサポートになり、運営資金の一部にも充てられるので、彼らにとっては CSR プロジェクトにもなるのです。実際にはフリーダイヤルが出て

いて、「ペローニの昔の記憶をお持ちの方は、ぜひここにお電話ください」とあって、ここに昔の記憶を持っているOBの方が連絡してくると、MEMOROのスタッフが行って撮影するという仕組みになっています。

もう一つ、イタリアでは億を超えるプロジェクトを取りました。最初にルカが自分のポケットマネーで数年間回して、みんなに給料を払っていた分が、これでやっと回収できたと言っていました。エネルというイタリアの電力会社、元国営企業だったような、イタリア全土をカバーしている電力会社で、「1ボルトが来た」という45日間のプロジェクトを実施しました。最初は、出版エキスポのようなところでブースを設けて、エネルギーにまつわる記憶を持つ方に椅子に座っていただき、昔の話をしていただく様子を公開撮影するというオープニングイベントを開催しました。そして、その日を皮切りにキャンピングカーに「1ボルトが来た」という大きなバナーを貼って、45日かけてイタリア全土の40都市を回りはじめました。村々では、昔、電力がなかった時代の話を、おじいちゃん、おばあちゃんに聞いて回りました。そして最初に電気が通ったときの感動のお話、「1ボルトが来た」ときの話も聞きました。さらにダム建設に昔携わった、つまり発電所の建設に携わったおじいちゃんの話なども収集しています。こうしてイタリア中を45日かけて回って大体200人に話を聞き、500本の動画を撮りました。

MEMOROでは、こういったプロジェクトを引き受けていくことによって、一般の人たちが投稿できる無料のオンラインアーカイブを維持しています。

日本でも、小さいのですが、最初のスポンサープロジェクトが取れました。「昔の『安全・安心』聞かせてください」ということで、セコムOBの3人の方に、セコムの創業期のころのお話をお聞きした動画を、プロのスタッフが制作させていただきました。セコムのホームページに行っていたら、「おとなの安心倶楽部」というものがあって、その中で3人のOBの方にお話いただ

いています。「以下のインタビュー動画は、セコムがMEMORO『記憶の銀行』を応援していることで、その活動の内容に沿って構成しました」と書いてくださって、MEMOROのロゴを入れていただきました。

今回はセコムさんがウェブページ制作費を持って自分たちのページを作りましたが、動画の制作だけはMEMOROに依頼したということです。これからはいろいろな会社に、MEMOROを応援してくださいということで、いろいろなプロジェクトを紹介していきたいと思っています。

### 「撮影の手引き」について

実際に撮るところのお話をさせていただくので、「撮影の手引き」を見てください。まずは皆さんにウェブページでユーザー登録をしていただくところから始まります。画面左側でユーザー登録をしてください。そうすることによってログインができるようになります。

撮影からアップロードまでの手引きですが、まずカテゴリーが出てきます。何を聞いてもよくて、最終的にはアップロード画面に記入していただくことになります。そのときに、ここに仕事、場所、教育、歴史、社会、飲食というカテゴリーがあって、歴史であれば、歴史の中にも災害や第一次世界大戦とあったりするので、最終的にその中から選びます。でも、全部「その他」があるので、要は昔の記憶であれば何でもいいのです。

それから、事前の打ち合わせがとても大切です。そのときにぜひ活用していただきたいのが「聴き取りシート」です。自分たちのノートでもいいのですが、私が今までやってきた経験でお話しすると、いきなり「昔の記憶を話してください」では、何を話せばいいのかわからないので、できるだけ詳細にテーマを決めて話していただくのがお勧めです。

そのときのテーマの決め方ですが、もう動画のタイトルを決めてしまう勢いです。例えば最初にいろいろ打ち合わせをしたり、ちょっとお話を聞

いてみたところで、「その話は面白そうですね」「ではこういうタイトルでどうですか」と言ってみると、語る人もそのことについて話せばいいと分かるので、話しやすくなります。そして人は振られると2分ぐらいは話します。お話し好きの人は永遠に話すかもしれません、テーマが細かければ細かいほど、何となく区切りが分かるので、話していただきやすくなります。

原稿を用意してお話しされる方も、いきなり話す人もいろいろありますが、どちらでもいいです。どのような形でアポを取るの分かりませんが、原稿は緊張するならば用意していただいてもいいのですが、個人的には次の世代に語り掛けるように、私に話すように話してもらった方が自然なので、私は原稿を用意しない方をお薦めします。どうしても心配な方は用意していただいてもいいですし、実際に原稿を読んでいるような動画もあります。

それからインタビュアーの声が多少入っても構いません。ただ、入れるときは、大きくはっきり入れてください。途中で小さく入れていると、聞いている側が何だか分からないので、入れるからにははっきりと、入れないからには入れない、そこはどちらかにきちんとしてください。

また、映像の編集は結構大変ですので、初心者の場合は2分ぐらいでとにかく切ることと、編集しないものを私はお薦めします。

ちなみにこれが私の MEMORO セットです。こんなもので私は撮っています。ここにスピーカーがあります。要は気軽に撮ってもらいたいです。

撮り方のポイントとしては、音に注意を払うということ。映像というのは何よりも音声が目です。画面がぶれていても声ははっきりしていれば、人は映像を見続けることができます。でも、画面がいくらクリアでも、声が聞こえなかったり、声が聞き取りにくかったりすれば、人は見たくなくなります。テレビを見ていると、取りあえず声が入っていると何を言っているのかが分かりますよね。とにかく声が録れていることが一番大事なので、

特に簡易なカメラを使う場合、私は必ず1mとか50cmぐらいのところにカメラを置いて話していただくようにしています。カメラを向いて話してくださいと言うとかなり緊張されるので、「私の方を向いて話してくださいね」と言って、カメラはできるだけ近いところにしてカメラ視線ではなくお話ししていただきます。ここまでがインタビュー映像を撮るときの基本です。

また、私は、インタビューというより、とにかくきちんとお話を聴くこと、私自身は透明になってお話を未来に伝えることを一番大事にします。少し慣れると、なにか凝った映像を撮りたくなったり、思わずズームしたくなったりもするのですが、全然大事ではないところでズームしてしまっただけでズームアウトしたりすると、見る側は落ち着きません。皆さんがそんなに慣れていないのであれば、カメラは固定で、ズームしないことです。

また、編集ができなければ、「では、戦争のころの食べ物のお話をお願いします。いきますよ。私がこうしたら話してくださいね」と言って、始めていただいて、お話が一段落したと思ったら、「ありがとうございました」といって停止ボタンを押すと、編集なしで動画が1本できます。1本の動画が2分程度あれば十分です。さらに話したければ、「ではもう一つお話しください」とできるので、取りあえず初心者の方には、私はカメラの撮影スイッチのオン・オフで細かく区切ったテーマごとに数分程度の動画を複数撮っていくことをお薦めしています。

もちろん、撮影した動画を編集したい方は自由にしていただいてもいいのですが、MEMORO の場合は映像に凝ることよりむしろ、話を残すところがポイントなので、できればそちらの方に集中していただきたいと思います。

あと、今の MEMORO の動画では、オープニングにタイトルを入れていますが、それもできる人はしていただいて、できなければなくてもいいです。大体私たちが入れているのは、お名前と生年月日、動画のタイトル、あとは撮影日、そ

の4点をタイトルとして入れています。皆さんであれば、「梅崎ゼミ」と書いても全然いいですし、最後に作った人たちのエンドロールを入れてもいいですし、どうぞご自由にしてください。ただ、「ユーザー」というのは、このユーザーに対して動画があるということになるので、できれば本当は1人1本撮っていただきたいのです。つまり自分一人でユーザー登録をして、自分の動画ということで活用していただけたらと思います。また、今回は授業ですので、たとえば3人のチームでやったような場合は、チーム名を付け、そこに3人の名前を無理やり入れるなどして、お名前が残るようにしていただいても結構です。

もう一つ、撮るときには一度話していただき、音声のテストと映像のテストを必ずしてください。これはもう絶対条件で、それをしなかったがために台無しになることがあります。テストでちゃんと聞こえていることを確認してから始めてください。

あとはちょっと細かいことですが、後ろが光り過ぎていて飛んでしまうので、逆光にならない方が顔はきれいに映りますが、テストをすれば、大体こんな感じだと分かります。

それから今回の注意事項として、アップロードしていただくときに動画の説明文も簡単に入れていただきたいのですが、皆さんが1週間で公開しなければならぬ動画であると一応分かるように、「梅崎ゼミ」など、何かキーワードを入れておいてください。そうするとほかのものと区別して早々に公開するので、それはぜひお願いします。可能であれば追加で、「info.jp@MEMORO.org」に「『梅崎ゼミ』で動画をアップしました」というメールを頂けると漏れがないと思うので、お手数ですが、それをお願いできればと思います。

もう一つ、アップロードをするときにタグというものがあります。これでいろいろな検索が引っ掛かるようになってくるので、皆さんが未来の子どもになったつもりで、どんな言葉でこの動画を検索してほしいかをできるだけ考えて入力してください。動画の中で出てくる言葉、固有名詞もそう

ですし、出てこない言葉でも、例えばそれが昭和30年代の話であるとすれば「昭和30年」など、「30年代」などと言っていないだけでも、こういう言葉で検索したら引っ掛かりそうな言葉をできるだけたくさんタグに入れるようにしてください。

細かいことは全部「撮影の手引き」に書いてあるので、じっくり読んでいただければ分かると思います。

一つ、ちょっと恥ずかしいのですが、私の撮影の仕方の動画があります。

### \*\*\*動画3\*\*\*

この方に動画を見てもらって、こんなものですよと言っています。

### \*\*\*動画4\*\*\*

このような動画も作ってみました。あのような感じで打ち合わせをして、気楽にさせていただきます。最初はちょっと緊張しているかもしれませんが、この方も話しているうちにどんどん慣れてきました。

最後にすごく気楽な感じの動画を紹介して終わりたいと思います。今の方のお話です。これも土地にまつわるお話なので、参考になると思います。

### \*\*\*動画5\*\*\*

これは5話目か6話目ぐらいだと思いますが、だんだんカメラがあることを忘れます。ですので、普通にこちらに話してくださいと言っていた方が、気楽にお話をしていただけたと思います。

最後にちょっと技術的なことです。手引きの方を読んでいただければ分かるのですが、映像の大きさについてです。最新のカメラでハイビジョンなどで撮ると、とてつもない大きさになりますが、アップロードできるMAXが250メガになっています。でも、これはパソコンでしていただくときに分かると思いますが、誰のパソコンにも大

体入っている Windows ムービーメーカーで編集していただいたり、ファイルを保存し直していただいたりすると 50 メガ前後になります。ムービーメーカーで編集していただければ問題はないかと思いますが、20～50 メガぐらいのものをお送りいただければと思います。

実際、アップロードに結構時間がかかります。回線の調子がいいと 50 メガで 10 分ぐらい、時々 20 分ぐらい放置されたりしますが、ゲージが上がって行って、一応動いているので、心配しないでください。

一とお説明させていただきましたが、何かご質問はありますか。やってみないと分からないでしょうし、あとはどんなプロジェクトにするのかということ、この後お話しされるのですよね。

## 質疑応答

**梅崎** 私たちは普通のインタビューというのは今期のゼミでも一度やったのですが、映像化はまだやっていません。普通のインタビューは、インタビューしたものを文章などにするだけですが、記憶の銀行さんは動画として世界に公開されます。お話ししてくれる人に依頼するときに、動画を世界に公開しますと言うと、断る人もいると思うのです。そのように言われる方をどのように説得されるのでしょうか。

**富田** すごくいい質問で、私たち MEMORO のスタッフも、そういう場面に何度も当たったり、私も母に出てもらうのに相当交渉しました。本当に人それぞれですが、私は MEMORO の趣旨を、いかにみんなが熱く語ってくれるかによると思います。ただ「出てください」「昔の話を聞かせてください」だと、みんな何のことやら、一応パソコンで見せられたとしても、いまいびんと来ません。これは 50 年後、100 年後、200 年後の子どもたちが見ますが、その方にとっては何の変哲もない話かもしれません。自分が経験してきたことですから、「大したことないわよ。話すようなことはないわよ」と言う人はたくさんいますが、それが実際に聞きたいし、同じことを商店街の隣の

人が経験したとしても、感じ方や見たものが違ったり、一人一人違う記憶があるということ子どもたちに伝えたいのです。そういった意味では、自分なりに MEMORO の活動の意義は何なのか、できれば皆さんの中で考えてから、インタビューをお願いしていただきたいと思います。

なぜ MEMORO がこんなにメディアから取材を受けて、なぜみんながこんなに手伝ってくれるか、ということをそれぞれに聞くと、一人一人に熱き理由があります。私の場合は、自分がやってきた仕事というか、自分のライフミッションにそのまま合っていたので、「これをやるぞ」と入ったのです。

例えば今ここにいる松本さん、法政大学の皆さんの先輩です。どうして MEMORO を始めましたか。何がきっかけで、どうしてやろうと思いましたか。

**松本** 私は、こういった記憶をつないでいくということにすごく魅力を感じたことと、今はまだご存命の方が多いと思いますが、私もあと 50 年後などになるともっと年になって、今いらっしゃる方も、もしかするとほとんどいなくなっているかもしれません。その記憶がどんどんたまっていったときに、何か大きいことができるのではないかと思ったというのが、一番魅力に感じたところでした。

**富田** ありがとうございます。そういう意味で、人それぞれみんな違う理由を感じて MEMORO に参加しています。例えばスタッフであるプロの映像ディレクターの人も、プロの仲間から「なぜこんなボランティアにかかわっているの」と言われたりするらしいのですが、彼の理由は、ジャーナリズムという視点から映像を作るのではなく、MEMORO ではもっとつなげることができる、純粋に話が聞けるところが面白いという違いを感じているそうです。双子の赤ちゃんが生まれたスタッフもいて、その人は子どもが生まれたときに「この子たちに伝えていかなければならない未来がある」と思って、ちゃんとおじいちゃん、おばあちゃんの話を残しておこうと思ったそうです。

100人いたら100人のMEMOROがあるので。そういった意味ではイタリアのいいところなのか、MEMOROの意義とは何か、特に言っていないのです。ただお年寄りの記憶を集めて公開しようというサイトを運営しているだけで、ミッションやビジョンなど、そんなことはほとんど言っていない。私も最初に日本で活動を始めるときには、イタリアの意思に沿った方がいいだろうと思って、何のためにやっているのか、子どもの教育のためなのか、未来にどうこうしたいという何か想いがあるのかなど、たくさん聞いたのですが、実はあまりないというか、人それぞれの想いがあるだけで、MEMOROとしてオフィシャルに決めていることがないのです。

だからこそ、それぞれの人たちに、それぞれのMEMOROに参加する理由があって、今は世界中に広がっています。私はみんなの参加理由を知りたくて、世界の人にアンケートを取ったのですが、ドイツの50歳ぐらいの人は今までずっとコンピューターメーカーで働いていましたが、人生について考え直そうと思って、インドに修行に行き帰ってきて、高齢者にパソコンを教えたときにMEMOROに出会って、これだと思って始めたそうです。また、今までキャリアウーマンでばりばり働いていたスペインの女の子は、子どもが生まれたのをきっかけに何か社会的な活動をしたいと思って、MEMOROを始めようと思ったそうです。ベネズエラでは、確かオーラルヒストリーか何かの研究室がMEMOROの事務局をしています。

ですので、手を挙げた人たちがそれぞれの理由でMEMOROを始めているのです。そういった

意味では、今回皆さんにもその意義を、皆さんの中で考えていただいた上で、お年寄りに説明していただきます。その熱さが伝わるかどうか、その方がインタビューに答えてくれるかどうかの鍵になると思います。

私の母は、ずっと「嫌だ、恥ずかしい」「ママの顔が出るのは嫌だわ」と言っていたのですが、おいっ子が生まれて、「おいっ子のために残しておいて」と言うと、それで初めて「ああ、そうしてみようかな」と思ってくれました。

ですので、100年後、その人の顔がどうだったかということではなく、話していることが大事だし、自分が出たがりか、出たがりではないかということではなく、どんな話も貴重であるというぐらいの、大きな意義を持って訴えかけていただければと思います。

今回皆さんには、それを説明していただくときに使えるかなと思う資料を渡しました。新聞記事などがあると分かりやすい、信用してもらえる、こんなメディアに出ていますといった内容のものを抜粋したので、それをコピーするなり何なりして活用してください。もし必要であれば、紙だけではなく、データでもお渡しいただければと思っています。

今日、私はものすごく大事なものを忘れました。MEMOROのチラシです。それをみんなに配ろうと思ったのですが、忘れたので、次週までに先生に送ります。A4・1枚でMEMOROについて説明してあるので、それを配っていただいて、新聞記事などと一緒に説得していただければと思います。

## **Oral History in Intergenerational Programs: The case of The Bank of Memories**

UMEZAKI Osamu

---

This report is the oral records described to us by Ms. Naoko Tomita, a representative of The Bank of Memories, Japan (MEMORO), which collects elderly people's memories as a form of oral history and opens them to the public via the Internet. MEMORO can be reproduced in the community in many different ways. The social network in the area is declining, and developing exchanges

between generations is encouraged. These oral records are meaningful to understand the role of oral history in Intergenerational Programs. Many problems have arisen with regard to managing these Intergenerational Programs. This oral statement record reports the concrete methods used in the Intergenerational Programs.